

## 《論文》

# 熊本県師範学校における郷土教育 —地域社会における郷土教育の実践(続)—

高 島 秀 樹

## 目次

はじめに

1. 郷土教育の盛行と師範学校教育
2. 熊本県師範学校における郷土教育
  - (1) 熊本県師範学校と『本校における郷土教育の概要』
  - (2) 郷土教育の目的と方針
  - (3) 郷土教育の実践
    - 1) 郷土研究室
    - 2) 郷土教育の方法
    - 3) 郷土教育にかかわる生徒の研究例

おわりに

## はじめに

近年、文部科学省・教育委員会等の教育政策・学校教育政策において、またそれを受けた学校における教育実践においても地域社会と学校の関係を密接なものとしていこうとする考え方が顕著となってきた。筆者は1872（明治5）年の「学制」の頒布に始まる日本における近代的な学校制度創設以降の地域社会と学校の関係についての考え方の歴史的展開の中で、地域社会と学校の関係を重視しようとする考え方が特に盛行を見た時期・運動としては1920年代以降（特に昭和初期以降）の郷土教育運動と1940年代後半以降（昭和20年代以降）のコミュニティ・スクール運動の二つが代表的な存在であると把握している<sup>1)</sup>。筆者はこのような基本的な認識に立ってこれまで郷土教育運動やコミ

ュニティ・スクール論に関して資料を収集し、その解読・検討を重ねてきた<sup>2)</sup>。

このうち郷土教育運動については、海後宗臣・飯田晁三・伏見猛弥『我國に於ける郷土教育と其施設』（1932年、目黒書店刊）を取り上げて、昭和初期における郷土教育運動の概況を明らかにし<sup>3)</sup>、さらに個別の資料として『郷土教育より見たる川崎市教育』（刊行年、発行者不詳）を取り上げて、地域社会における郷土教育の受容と実践について考察を加えた<sup>4)</sup>。本稿においては、熊本県師範学校『本校に於ける郷土教育の概要』（1935（昭和10）年3月刊）を取り上げ、前稿に引き続いて地域社会において郷土教育がどのように受容され、どのように実践されていたかを明らかにすることを第1の研究目的とする。さらに前稿で検討を加えた初等教育段階の学校とは異なり、主として初等教育

教員養成を目的とする師範学校において郷土教育の考え方がどのように認識され、どのように実践されていたかを明らかにすることを第2の研究目的とする。これは初等教育段階の教員が郷土教育についてどのような認識、知識や教育方法を身につけて教壇に送り出されていたかを明らかにすることによって、初等教育学校での郷土教育を規定する一要因を明らかにすることにもなると考えている。

## 1. 郷土教育の盛行と師範学校教育

日本における近代的学校の創設は1872（明治5）年に頒布された「学制」に始まるが、近代的学校の創設・普及のためには近代的教育の実践に必要な資質を身につけた教員が必要なことは言うまでもない。そのために国は「学制」の中で「小学ニ教ル所ノ教則及其教授ノ方法ヲ教授」するものとして「師範学校」を規定したが、この規定に即して東京に設置されたものが日本における最初の師範学校であるとされている。その後、教員需要の急速な増大に対応して各府県において教員養成機関が設けられたが、それら多様な教員養成教育を一定の内容と水準を保つものとするために1881（明治14）年には「師範学校教則大綱」、1886（明治19）年には「師範学校令」を施行して整備が進められたが、さらに1907（明治40）年には「師範学校規程」により、小学課程8年（尋常小学校・高等小学校）の上に4～5年間の師範教育・教員養成を行う「本科第一部」と、中等学校卒業者を受け入れて1年間（後に2年間となる）の師範教育・教員養成を行う「本科第二部」の制度が設けられた<sup>5)</sup>。このあと1943年（昭和18）年には師範学校は官立の3年制専門学校となり、さらに1949（昭和24）年から第二次世界大戦後の教育改革の中で師範学校は順次廃止され、大学・学部において教員養成が行われるようになった。

教員養成を主目的とする師範学校において、郷土教育の盛行を見た時期に郷土教育に関する教育が行われたことは言うまでもない。郷土教育についての貴重な研究成果である伊藤純郎『郷土教育運動の研究』によれば、師範学校において郷土教育が明確にその教育内容として取り入れられたのは、1931（昭和6）年4月に施行された「師範学校規程中改正」における学科目「歴史・地理」に関する規定の改訂、学科目「公民科」の設置からであると指摘されている。伊藤は、「歴史・地理」においては、①「忠君愛国ノ志氣ニ富ム」師範学校生徒の育成を目的とする「師範教育令ノ旨趣」<sup>(ママ)</sup>の徹底が学科目の内容において一層鮮明にされたこと、②教授に関する具体的な注意事項が削除されたが、それは画一的教育の打破、教育の地方化・実際化を推進する意図によること、③地理科「地方研究」が、「地方ノ風土ニ関スル沿革及情勢ヲ理解セシメ」る科目として明記されたことの3点に留意すべきであると指摘している。さらに「公民科」の設置については、「公民科ハ憲政自治ノ本義ヲ明シ日常生活ニ適切ナル法制上、経済上並ニ社会上ノ事項ヲ授クヘシ」と記され、その目的は「地方ノ實際生活ニ適切ナル教育ヲ為ス」ことにあることは明らかであると指摘している<sup>6)</sup>。

当時、各師範学校において郷土教育がどのように実践されていたかについて、海後宗臣・飯田晁三・伏見猛弥『我國に於ける郷土教育と其施設』においては、「師範学校に就いて見るに郷土教育的傾向は一層著しく現はれている。」と指摘したうえで、上記の「師範学校規程」の改正の中に示されている「地理」の教育目的が「……又各地方研究ヲ課シテ地方ノ風土ニ關スル沿革及情勢ヲ理解セシメ」と規定されていること、その施行上の注意事項、教授要目中の注意事項において「地方研究ニ於テハ特ニ實地ノ

調査ニ重キヲ置キ其ノ研究法ヲ指導スベシ、」と規定されていること、さらに「…(略)…地理、歴史科に於て郷土に關係する事項は特に詳しく説明すべきこと…(略)…」とされていることを紹介している。また、「…(略)…公民科に於ても『我が郷土』とか、家、市町村の如き郷土的材料を多分にとり入れてゐること…(略)…」を指摘している。その上で「郷土教育に大いに關心を示した文部省は昭和五年度より師範教育費國庫補助金の一部を師範學校に於ける郷土研究施設費に對する補助金として交附した。」こと、それが「…(略)…郷土室等を作らんことを慫慂せるものであらう。」こと、「その結果は大いに我教育界に影響を及ぼし、之によつて急に郷土教育は盛んになれる觀がある。」と指摘している<sup>7)</sup>。このような師範学校における郷土教育についての基本的な政策や概況についての記述はあるものの、この調査・著書は小学校については具体的に調査し、その結果を詳細に示しているが、師範学校については具体的な調査結果の紹介は見られない。当時、師範学校において郷土教育がどのように実践されていたかについて取り上げているのは前掲の伊藤の著書であって、伊藤は『郷土教育』誌に第18号(1932(昭和7)年4月号)から3回にわたって掲載された「全国師範学校郷土研究施設状況」を取り上げている。これは前年度末に郷土教育連盟が全国の師範学校と県学務課等に対して実施した「郷土研究施設」に関する照会の結果を紹介したものである。回答数であるが、誌上には20校の回答が先着順に掲載されているとのことであり、その結果から伊藤は郷土教育運動に対する師範学校の動向として、①「…(略)…郷土研究に対する理解と準備が師範学校の郷土教育の内実を強く規定したこと…(略)…」、②「…(略)…郷土研究を通じて郷土の教育化、教育の郷土化・實際化・地方化をはかり、児童

に正しい郷土意識を付与することを目的としながら、一方で、郷土を感情的に捉え、児童に郷土愛を啓培し、愛国心を涵養しようとする意識が強いこと…(略)…」の2点を指摘している<sup>8)</sup>。なお、ここでは回答を寄せた20校中郷土教育の目的や郷土の認識といった課題に言及した11校の回答が紹介されているが、その中に本稿で取り上げている熊本県師範学校は含まれていないことを付言しておく。

筆者は1920～1930年代(昭和初期)において郷土教育の考え方が国の教育政策として推進され、盛行を見たのは教育の抽象化を克服し、身近な、経験に即したものとしようとする大正自由主義教育から連なる考え方がその底流に存在したことは否定できないものの、それ以上に郷土への関心・郷土愛を育てることによって国への関心・愛国心を育てることにつなげようとする考え方が存在したこと、さらに、この時期の経済不況に対する対策の一つとして推進されていた「経済更生運動」との関連が大きく影響していたと理解している。

なお、ここで取りあげる資料が刊行された1935(昭和10)年は、1930(昭和5)年の文部省による師範教育費國庫補助金の一部を郷土研究施設に對する補助金として交付した後の時期であり、さらに1931(昭和6)年の師範学校規程中改正によって郷土教育が師範学校の教育内容として取り入れられた後の時期であり、いわば師範学校における郷土教育が普及・深化した時期であると位置づけられる。

## 2. 熊本県師範学校における郷土教育

### (1) 熊本県師範学校と『本校に於ける郷土教育の概要』

本資料の著者(刊行者)である熊本県師範学校は、1874(明治7)年に開設された(県立)仮熊本師範学校に淵源を持ち、1878(明治11)

年に（県立）熊本師範学校として創立された。その後「師範学校令」「師範学校規程」に対応した組織の改編や、校名の変更などを経て、1914（大正3）年には（県立）熊本県第二師範学校の創立に伴い（県立）熊本県第一師範学校となったものの、1931（昭和6）年には両校が合併し、ふたたび（県立）熊本県師範学校となった。1943（昭和18）年には（官立=国立）熊本師範学校となったが、その時に1901（明治34）年に創立された（県立）熊本県師範学校女子部（1911（明治44）年に（県立）熊本県女子師範学校となっていた）を統合し、（官立）熊本師範学校男子部・女子部となった<sup>9)</sup>。

本資料の刊行時である1935（昭和10）年は、1907（明治40）年の「師範学校規程」にしたがって熊本県師範学校においても本科第一部と本科第二部が置かれていた時期、1931（昭和6）年の統合後の時期、1943（昭和18）年の国立化以前の（県立）熊本県師範学校の時期である。

ここで取り上げる資料『本校に於ける郷土教育の概要』は、ほぼA5版相当（やや縦に長い）、本文21頁からなる。外表紙には「昭和十年三月

本校に於ける郷土教育の概要 熊本縣師範學校」と刊行年月、著書名、著者名（刊行者名）が記されており、内表紙には「本校における郷土教育の概要」と著書名のみが記されている<sup>10)</sup>。内表紙裏には目次が記されているが、その内容は次の通りである。

## 目次

### 一、郷土教育の目的

### 二、郷土教育の方針

### 三、郷土教育の實際的施設經營

#### 1) 郷土研究室

#### 2) 各科教授の郷土化と研究題目

#### 3) 郷土研究一日旅行

#### 4) 休暇中に於ける郷土研究

#### 5) 郷土研究發表會

#### 6) 展覽會

#### 7) 郷土偉人祭典

#### 8) 郷土讀物編纂

### 四、調査研究資料一斑

### 五、生徒の郷土研究業績の一例<sup>11)</sup>

内容に関しては以下で検討を加えるが、筆者が前稿で検討を加えた『郷土教育より見たる川崎市教育』に比して著者（刊行者）名、刊行年月が明記されており、資料としてより信頼性の高いものと位置づけることができる<sup>12)</sup>。

なお、本資料『本校に於ける郷土教育の概要』は、故銅直勇明星大学人文学部社会学科教授（1964（昭和39）年～1978（昭和53）年在任、在任中に学科主任（1965（昭和40）年～1977（昭和52）年在任）・人文学部長（1968（昭和43）年～1978（昭和53）年在任）を務める）の没後、ご長男である故銅直健氏ははじめご遺族のご厚意により明星大学に一括して寄贈された蔵書・著書・ノート・資料等の中に含まれていたものである。故銅直教授は1943（昭和18）年4月から1949（昭和24）年5月まで熊本師範学校校長を務めており、その際に入手したものと推測される<sup>13)</sup>。本資料が刊行された1935（昭和10）年当時には故銅直教授は財団法人成城学園理事、成城高等学校長・成城高等女学校長・成城小学校長・成城幼稚園長の任にあり、本資料の刊行に直接関与していたとは考えにくいことを付言しておく。

### (2) 郷土教育の目的と方針

本資料において郷土教育の目的については、次のように記載されている。

本校に於ける郷土教育は教育の方法としての



郷土教育より一步を進めて目的としての郷土教育を高揚し生徒をして郷土の正しき認識即ち自然人文の統一体たる郷土を全体的綜合的に理解せしめ以て郷土愛の醇化を圖り更に理想的郷土の建設への基礎陶冶をなすを以て目的としてゐる<sup>14)</sup>

冒頭に「教育の方法としての郷土教育より一步を進めて」と記されていることは、師範教育の中で郷土教育の方法について身につけるべきことは当然の前提、もしくは既に一定程度実践されていたという認識があったものと理解される。その上で、「郷土の正しき認識」郷土の「全体的綜合的理解」を身につけることがあげられているが、そのような「認識・理解」の段階に留まらず、それを通じて郷土愛を育成し、さらに郷土建設に寄与しうる人材を養成するというきわめて実践的な目的が明示されていることに注意すべきである。

このように目的を設定したうえで、その目的達成に寄与するものとなるように、郷土教育の方針として次の7項目が掲げられている。

1. 郷土を以て教育上の材料であると共に原理として考ふるこ
2. 郷土と自己との關係及び正しき郷土の理解が必竟眞の自己の理解なることを了知せしむること
3. 熊本縣の特殊性を確捉し以て郷土改善に盡瘁し進んで郷土教化改善の中心者たるべき教育者養成を企圖すること
4. 郷土愛を偏狹ならしめず之を醇化し引いては祖國愛の精神を振作すること
5. 本校實行要目の一たる勤勞創作の精神を體現せしむる様指導すること
6. 從來の煙火線香式學說と同一視せず飽く迄之が眞目的を十分達成する様強靱なる經

營をなすこと

#### 7. 各學科における郷土教育を強調すること<sup>15)</sup>

いずれの項目も前掲の郷土教育の目的を達成するための方針として理解しうるものであるが、特に3. に示される「郷土教化改善に寄与する教育者の養成」、4. に示される「郷土愛を祖國愛に関連づけ、展開していくべきである」という点が特に注目されるべきであると筆者は考えている。

また、7. では郷土教育が一定の科目においてのみならず、各教科において行われるべきことを示しているが、この点については「三、郷土教育の實際的施設經營」の「二、各科教授の郷土化と研究題目」において詳述されている<sup>16)</sup>。

#### (3) 郷土教育の實踐

本資料の目次からも理解されるように「一、郷土教育の目的」、「二、郷土教育の方針」について簡明な説明を加えたうえで、「三、郷土教育の實際的施設經營」以下では熊本県師範学校における郷土教育實踐についての具体的な説明となっている。

##### 1) 郷土研究室

熊本県師範学校における郷土教育實踐の基礎、拠点となるのは「郷土研究室」である。ここでは初めに郷土研究室の「施設經營の方針」が示されているが、その内容は次のとおりである。

イ、郷土研究室の施設經營は有効適切なる具體的系統的有機的方法を企畫し本校郷土教育の目的達成に資すること

ロ、郷土資料は汎く全縣下に亘り一定の方針の下に選擇蒐集し各方面より郷土を正しく

理解考察し得る如く之を科學的且つ教育的に美的に整備すること

ハ、常に新資料の蒐集製作に力め郷土研究室の擴充を圖ること

ニ、郷土研究室は各學科との連絡を緊密にし共に機能を充分發揮せしむること

ホ、常に郷土研究室の活用を考究すること<sup>17)</sup>

ここに示されている方針は一般的なものであり、熊本県師範学校の独自性は顕著ではないが、資料収集の範囲が県全域にわたる点は、小学校の事例と異なり、県立の師範学校であることを反映している。

このような方針を受けて、「2. 施設經營の方法」において郷土研究室の具体的な姿について詳しく示している。熊本県師範学校における郷土研究室は第一室と第二室の2室からなり、各々の面積は20坪（約66㎡）と25坪（約82.5㎡）である。第一室は「研究室兼用」とされ、収蔵資料については「…（略）…主として文科的方面の資料を蒐め殊に偉人名士の肖像を掲げて精神陶冶の一助とし」ている。第二室は「…（略）…主として理科的方面の資料を陳列…（略）…」するが、「…（略）…特に生産品に對してはなるべく其の生産過程、需要、供給、販路等を明瞭にし生徒をして此等生産品の改良を要すべき品につきて考究せしめ、一方に於ては縣下全体の大勢を觀察して將來兒童教育に當りて何れの點に最も努力を拂ふべきか等につき留意せしむる様努めたること」<sup>18)</sup>と記されている。この郷土研究室の構成は郷土教育において利用すべき資料について、大別して2種類あること、その各々が教育・指導上どのような意味を持つかを示唆していると考えられる。

本資料では続いて「3. 郷土研究室規定」（全8条）を示している。第1条では郷土研究室の目的について「郷土研究室ハ郷土ニ於ケル自然

人文各般ニ亘ル資料ヲ蒐集陳列シ各教科ノ教授ニ資スルト共ニ郷土研究ノ手引タラシメ進ンデ郷土ニ對スル認識理解ヲ深メ郷土意識郷土愛ノ啓培涵養ヲハカルヲ以テ目的トス」と規定している。この内容は先に示した本資料「一、郷土教育の目的」と基本的に共通するものと理解できるが、単に郷土教育・郷土研究に対する資料を提供し、その理解に寄与することのみならず、「郷土意識郷土愛ノ啓培涵養ヲハカル」と明示している点は注目すべき点であると重ねて筆者は考える。第2条では、經營と研究のために教科に対応する8部を設置すること、第3条では役員（郷土研究室主任、副主任、部主任、生徒係員）をおくこと、第4条ではそれらの役員の任務が、第5条では物品購入手続きが規定されている。第6条～第8条は利用規定であるが、第6条では本校職員・附属小学校職員の利用、第7条では生徒の利用、第8条で外来者の利用について規定していることは、郷土資料室の利用者がどのような範囲に及ぶものと想定していたかを示唆するものであるといえる<sup>19)</sup>。

続いて「4. 郷土研究室の内容」という項目があるが、別に『別冊郷土研究資料目録』が作成され、そこに記載されていたようで、ここでは具体的な資料名は省略されている。「5. 活用」では机、椅子、黑板等の設備について示されている。なお、「6. 郷土研究室分室」の項目は注意されるべきものであって、「これは附属小学校に於て經營せるもので主として小學校兒童の郷土教育に活用せられつゝあり尙教生に對する指導にも利用せるものである。」<sup>20)</sup>と記されており、附属小学校に分室が設置されており、師範学校と附属小学校の間で郷土教育に関する連携が図られていたことを示しているものと理解される。

## 2) 郷土教育の方法

「三、郷土教育の實際的施設經營」の「二、各科教授の郷土化と研究題目」以下では、郷土教育の実践について具体的に示されている。

その中で第一に示されていることは郷土教育が郷土科においてのみ行われるべきものではなく、各教科の中で行われるべきであるという基本枠な考え方である。この考え方については、次のように示されている。

各科に於て教授細目を作成し小學校教材との連絡並に郷土化の欄に於て各科教授の郷土化をはかり且つ調査蒐集製作せる資料と研究の成果とを活用し又は實地調査研究等によつて教授の郷土化を企圖している<sup>21)</sup>。

ここで示されている「各科」とは、郷土研究室に設けられた「部」に対応するものと考えられるが、その「部」には修身公民教育部、国語漢文部、歴史部、地理部、理化部、博物部、実業部、美術工芸部の8部が示されており、郷土

教育がこれらの各教科教育の中で実施されるべきであり、収集された資料や研究成果を活用すべきこと、実地調査研究を活用すべきことが意図されていたと理解することができる。なお、本資料ではこの次に前述のように「研究題目は省略す」と記されており、「研究成果を活用」すべきという基本的な考え方は示されているものの、その素材となる具体的な研究題目を知ることができない点は残念である。

郷土教育を実践していくための方法として実地調査研究を重視すべきことは上に示されているが、「三、郷土研究一日旅行」の項目では、本科第1部・第2部1年生より卒業に至るまでの各学年と専攻科において見学調査を実施するための「郷土研究一日旅行」を年3回必ず実施するとして、その見学調査先について「…(略)…縣下の樞要なる地方につきて地理、歴史、理科、實業等の見學調査を遂げ得る如く組み立て…(略)…」<sup>22)</sup>たものとして旅行方面・見学箇所を次の表のように示している。

表1. 郷土研究一日旅行方面一覧

郷 土 研 究 一 日 旅 行 方 面 一 覧		
學 年	方 面	見 學 箇 所
一部第一學年	金峰山 大觀峰 立田山	營林局見本林、峠の茶屋、岩戸観音、金峰山 黒川發電所、内牧温泉、大觀峠、阿蘇五岳 參勤交替道、御薬園跡、櫻山祠殿、秋山玉山、富田大鳳の墓、豊國廟跡、泰勝寺跡、武藏塚、御野立所、立田山
一部第二學年	川尻、隈庄 三角 高瀬	大慈寺、木原不動、蓴菜池、隈庄町、六殿神社、阿高貝塚 三角港、不知火、金桁温泉 繁根木八幡宮、繁根木古墳、廣福寺、穴觀横穴、舟山古墳、西南役史蹟
一部第三學年	阿蘇山 八代 隈府	西巖殿寺、古坊中、阿蘇噴火口、阿蘇神社、宮地町 八代町、八代宮、八代城趾、傳習堂趾、悟愼寺、征西將軍御墓、セメント會社 製紙工場 菊ノ池、菊池則隆公墓、菊池氏發祥ノ地、北宮、菊池武重公墓、東福寺、菊池能運公墓、正觀寺、月見殿趾、菊池神社、孔子堂趾、隈府町

一部第四學年	萬田、四ツ山 黒石原 熊本市花岡山	萬田炭鉱、四ツ山炭坑、三池港、大牟田市 種馬所、種畜場、養鶏場 花岡山及其の附近の史蹟、北岡神社、妙永寺、國府趾、且過瀬戦蹟、石塘、蓮臺寺、白川懸廊趾、鐘淵工場
一部第五學年	人吉  天草  熊本市	球磨川溪谷、神瀬石灰洞、絨月城址、大村横穴、東林寺、青井神社、願成寺 天草松島、阿村墳墓、維和古墳、本渡町、水平焼窯業場、本渡城趾、切支丹宗教會堂趾、富岡町、富岡城趾、鎮道寺、臨界實驗所、千人塚 加藤神社、熊本城、陸軍教導學校内史蹟、成趣園、國分寺趾、託麻原古戦場、製蠟會社、アルコール會社
二部一学年	阿蘇山 黒石原 隈府	西巖殿寺、古坊中、阿蘇噴火口、阿蘇神社、宮地町 種馬所、種畜場、養鶏場 隈府町、菊池神社、正觀寺、東福寺、隈府城趾、月見殿趾、武重公墓
二部第二学年	人吉  八代  熊本市熊本城	球磨川溪谷、神瀬石灰洞、絨月城址、大村横穴、東林寺、青井神社、願成寺 八代町、八代宮、傳習堂趾、悟愼寺、征西將軍宮御墓、セメント會社 製紙工場 加藤神社、熊本城、陸軍教導學校内史蹟、成趣園、國分寺趾、託麻原古戦場、製蠟會社、アルコール會社
専攻科	水俣 熊本市花岡山 熊本市熊本城	水俣町、窒素肥料會社、淇水文庫、リアス式海岸 花岡山及び其の附近の史蹟、北岡神社、妙永寺、國府趾、且過瀬戦蹟、石塘、蓮臺寺、白川懸廊趾、鐘淵工場 加藤神社、熊本城、陸軍教導學校内史蹟、成趣園、國分寺趾、託麻原古戦場、製蠟會社、アルコール會社

出典：熊本縣師範學校『本校に於ける郷土教育の概要』7～9頁

①熊本県師範學校は1935（昭和10）年當時は熊本市内（京町本丁）に設置されていたが、調査見学先が県全域に広がっていること、②学年進行（郷土学習の深化）に応じて調査見学先が選択されていると考えられること、③調査見学先として特徴ある自然、史跡・寺社仏閣が含まれていることは言うまでもないが産業施設が多く含まれていることなどが注意されるべき点であると筆者は考えている。

この郷土研究一日旅行については、全校（全年）同一日に実施すること、事前に関係教員により事前指導を実施するとともにその教員が当日引率・現地指導にあたること、さらに『郷土研究一日施行必携<sup>(ママ)</sup>』（菊版280頁）を作成して

準備研究や整理の参考とするとともに、『郷土研究録』（200頁、5年間使用）を生徒に携行させて調査研究の結果を記録させ後日提出させ、級主任・郷土研究室主任・教務主任・校長がこれを読み批評を書き加えて返却するという指導方法を採用していたと示されている<sup>23)</sup>。

授業期間中は日程上の制約から一日旅行に限定されていたようであるが、休暇中には各自の出身町村を対象として自然・人文等全体的総合的に調査研究を実施することし、対象町村について系統的に調査研究を行うことができるように学年ごとに調査研究すべき課題を設定している。その内容は次の表のとおりである。



表2. 休暇中に於ける郷土研究

郷 土 研 究 夏 期 課 題 系 統 案		
<div> <div>題目</div> <div>学年</div> </div>	研 究 題 目	方 針
一部一年	一 村及ビソノ附近ノ植物採集 四、交通 交通圖 聚落圖 十一、俗傳ノ四 十二、方言訛言 十三、郷土ノ偉人孝子節婦等	郷土ノ自然、人文ノ簡單なる調査研究
一部二年	二、風土村及ビソノ附近ノ動物(昆虫)採集 四、交通 交通圖 聚落圖 六、衣食住一―十六七、社會生活ノ六 十一、俗傳ノ四 十二、方言訛言 十三、郷土ノ偉人孝子節婦等	全右
一部三年	一、村ノ歴史ト住民 二、風土 三、土地地形圖 四、交通 交通圖 聚落圖 五、農業ソノ他ノ生業一―廿五 六、衣食住 七、社會生活六―八 十、信仰 十一、俗傳 十二、方言訛言 十三、郷土偉人孝子節婦等 碑文蒐集	特ニ實業方面及ビ人文方面ニカラ注ガシム
一部四年 二部一年	一、村ノ歴史ト住民 二、風土地形圖 三、土地土地利用圖 四、交通交通圖 聚落圖 五、農業トソノ他ノ生業 六、衣食住 七、社會生活一―八 八、衛生 九、教育村民性 十、信仰 十一、俗傳 十二、方言訛言 十三、郷土ノ偉人孝子節婦等 碑文蒐集	郷土ノ自然的人文的研究調査ヲ一應完成セシム
専攻科 一部五年 二部二年	郷土研究要項ニヨル綜合的全般的調査研究  郷土發展方案	不備ナル點ヲ補足シ郷土ノ發展方案ヲ作成セシメテ郷土研究ヲ完成セシム

出典：熊本縣師範學校『本校に於ける郷土教育の概要』10頁

ここでは学年の進行にしたがって調査研究すべき項目を広げるとともに内容を深めていくという系統的な研究が計画されていることが第一の特徴であり、最終学年までには郷土の全領域についての研究を終えた上で、「郷土發展方案」を考えさせるという実践的活動が求められている点が第二の特徴である。さらに、この休暇中の郷土研究によって「…（略）…研究調査方法の實際を体得し且つ出身町村につきて正しき認識を得しめ…（略）…」<sup>24)</sup>ることが意図されていることは、師範学校であって卒業生が各地の教員として郷土教育の指導にあたるのが想定されて設定されていると筆者は理解する。

このような休暇中の調査研究の成果については、休暇後に研究物を学級主任に提出させ、学

級主任や郷土研究室主任がこれを読み批評を加えるとともに、全校生徒の調査物を展示する校内展覧会を開催している。さらに、夏期休暇中の郷土研究中特に優秀な者を各学年から10名程度選抜して全校職員生徒を対象とする「郷土研究発表會」において発表させている。本資料には「最近の発表會の題目」として14例が示されている<sup>25)</sup>。

郷土教育の実践については、さらに上記の夏季休暇中の調査研究の成果を展示する校内展覧會の開催、新しく収集した資料や研究成果を展示する公開展覧會の開催、郷土の偉人の一人を取り上げて祭典・記念講演会を開く「郷土偉人祭典」、偉人伝や郷土研究の指針となるべき「郷

土讀物編纂」計画が紹介されている<sup>26)</sup>。また、「四、調査研究資料一班<sup>(ママ)</sup>」では先に記した『別冊郷土研究資料目録』作成後新たに収集された資料が紹介されている<sup>27)</sup>。

### 3) 郷土教育にかかわる生徒の研究例

夏期休暇中の生徒の郷土研究中優秀な研究については「郷土研究発表会」において発表されていることは上述のとおりであるが、その最近の発表会（実施年不詳）の題目が「五、郷土教育発表会」に次のように示されている。

県内の電力に就いて	専攻科生
地形模型の作り方	二年一年生
湯前村調査の点滴	二年二年生
五箇庄に於いて	三年生
交通系統の變化と我が村の盛衰	専攻科生
球磨の植物に就いて	<sup>(ママ)</sup> 四年生
郷土の農業觀	五年生
私の郷土城山村	二年生
縣營新地昭和村に就いて	四年生
我が郷土坊中に就きて	二年生
我が郷土池亀の現在及び將來	五年生
郷土植物の研究法	五年生
私の郷土研究の態度	専攻科生
細川重賢公	教諭 <sup>28)</sup>

ここに示された例からみると、自らの出身地と推測される特定の地域の総合的な研究が比較的多くみられるが、電力・交通・農業など特定の産業分野に焦点を当てた研究、研究方法についての研究も見られる。これらの研究例のうち、「球磨の植物に就いて」は本科第一部<sup>(ママ)</sup>五年生が「…（略）…在學中、學業の餘暇或は休暇中に縣内限なくドーランかけて跋涉し遂に蘚類の世界新種十餘種を發見し學界に一貢獻をなしたる

輝しき業績…（略）…」であることから「五、生徒の郷土研究業績の一例」<sup>29)</sup>という別項において示されている。それによれば、*Entrodon Takakii* Sak. sp. nov.（つやごけ属の新種、阿蘇郡久木野村溪流中の岩上に産す）はじめ世界新種13種、*Glossadelphus Zollingeri*, var. *filicaulis* Fl（ひらつばごけ属の本邦新發見種、阿蘇郡北向山にて採集）はじめ日本新發見種2種、*Entodon akitense* Besch（従来本土においてのみ知られたもの、阿蘇郡久木野村にて採集）はじめ珍種11種を發見したことが紹介されている。なお、3年生によって採集された2種（新種・日本新發見種）も併せて紹介されている。

### おわりに

先にも参照した伊藤純郎はその著『郷土教育の研究』の中で、文部省が師範学校における郷土教育にどのようなことを求めていたのかについて、教育法令（規程）の視点からの考察をまとめて次のように要約的に指摘している。

…（略）…文部省の郷土教育運動は、一つには、画一的教育の打破、教育の地方化實際化といった大正中期から強く主張された教授方法改善の主張、二つには、郷土における「郷土研究」の實踐に象徴されるような「郷土研究」（「地方研究」）に対する地域社会の積極的な姿勢、三つには、農村を中心に日常生活の場である郷土が変貌する時代状況といったことを背景に、義務教育年限延長問題が延期され、師範学校教育の改善が叫ばれるなかで生まれた「師範教育費補助」を財源とすることで、まず、「郷土研究」の方法を身につけた「地方事情」に詳しい優良な「村住み」の師範生を養成し、続いて、師範生が赴任先の小学校で「地方ノ實際生活ニ適切ナル教育」を實踐して児童に正しい郷土意識を付与する

ことで「明日の村落」の樹立を目的とした、いわば「郷土認識建設運動」と述べることができる。…（略）…そこには、一つには、国家の基盤となる郷土の実情を正しく認識理解し、国民としての自覚を涵養することで、いわゆる教員「赤化事件」に象徴される「将来国民教育を背負って立つべき師範学校生徒の思想悪化」を防ぐ「国民精神ノ涵養」と、もう一つには、将来教師となって小学校に赴任する師範生みずからが「郷土研究」の方法論を身につけ、併せて赴任先の児童に「郷土の実情に即した实际的な教育」を施して正しい郷土意識を付与するという「地方研究」の思想が強く反映していたことはいうまでもない<sup>30)</sup>。

伊藤純郎のこのような指摘も参照して、本資料に示された師範学校、その一例としての熊本県師範学校における郷土教育の特質について次のように示すことができよう。

1. 本資料に示された目的、方針には卒業後初等教育段階の学校教員となり、各地に赴任するであろう教員を養成することを主目的とする師範学校における郷土教育の特徴が明確に示されている。

1-1. 最も基本的な目的は、卒業後初等教育段階の学校の教員として、教育内容、教育方法の改善としての郷土教育を指導することのできる教員を養成することであり、それは特に記載されることなく自明の前提とされていた。

1-2. その基礎として郷土としての熊本県についての正しい認識、自然・人文の統一体としての全体的・総合的理解を身につけることが目的とされていた。

1-3. さらに赴任後、その地域社会において郷土改善・郷土教化改善の中心者となる

ことのできる教育者の育成が目的とされており、赴任校における教育活動のみならず、地域社会に寄与することのできる人材の育成が目的に含まれていた。

1-4. 師範生自身はもとより、赴任後担当する児童に対して郷土愛を醇化することにとどまらず、それを通して祖国愛の精神を振作することが目的に含まれていた。

2. 郷土教育の内容、方法においても県立学校として熊本県全県下から生徒を受け入れ、卒業生が全県各地に赴任することを想定した師範学校における郷土教育の特色が示されている。

2-1. 郷土一日旅行の調査研究旅行先を見ると、学校の立地する熊本市のみにとどまることなく、学年の進行に従って調査研究先が広範囲になり、県内主要各地を対象とするよう計画されている。

2-2. 夏期課題を見ると、夏季休暇中に出身町村について学年を追って調査研究すべき課題が系統的に示されており、卒業までに該当市町村の総合的な認識が得られるように計画されている。これは卒業後赴任先において郷土教育の指導に当たる際に取り上げるべき内容についての総合的な理解を身につけさせることが意図されていたと理解することができる。

2-3. 郷土教育の方法については郷土研究室の整備を中心として取り上げられているが、これは卒業後赴任先の学校においてこのように充実したものではなくとも同種の施設を設置・運営する際にそのあり方や資料収集、運営方法等について身につけさせることが意図されていたと理解することができる。

3. 本資料は1935（昭和10）年という時点で、熊本県師範学校において刊行された1資料で

あるが、その検討結果からは、「郷土の理解」「郷土愛の醇化」「理想的郷土建設への基礎陶冶」という教育実践にかかわる意図とともに、「郷土改善・郷土教化改善の中心者養成」、「郷土愛を醇化することから祖国愛の精神を振作する」ことが明示されており、当時の文部省が意図した師範学校における郷土教育のあり方<sup>31)</sup>が師範学校において採用され、実践されていたと判断することができる。

本稿においては熊本県師範学校が1935（昭和10）年に刊行した資料から、師範学校において

郷土教育がどのように受け入れられ、実践されていたかを明らかにすることができたと考えている。しかし、これはあくまでも一事例の提示にとどまるものであり、今後さらに多くの事例を明らかにすることによって師範学校における郷土教育の普遍的な状況を把握したいと考えている。それが、初等教育段階における郷土教育のあり方を規定した一要因の解明にもつながるであろう。これが自らの課題であることを記して本稿を閉じたい。

（2014年8月・稿）

#### 【注】

- 1) 高島秀樹「学校教育の内容と地域社会」（岡崎友典・高島秀樹・夏秋秀房『地域教育の創造と展開』2008年、所収）93～94頁
- 2) 高島秀樹「地域社会における郷土教育の実践—『郷土教育より見たる川崎市教育』—」（『明星大学社会科学研究紀要』第34号、2014年、所収）39／49～50頁、など
- 3) 高島秀樹「『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討（その1）—教育調査史の視点から—」（『明星大学社会科学研究紀要』第27号、2007年、所収）  
高島秀樹「『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討（その2）—「地域社会と学校教育」の視点から—」（『明星大学社会科学研究紀要』第28号、2008年、所収）
- 4) 高島秀樹 前掲、注2と同
- 5) 石戸谷哲夫「師範学校」（日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986年、所収）367～368頁
- 6) 伊藤純郎『郷土教育の研究』1998年、112～115頁
- 7) 海後宗臣・飯田晁三・伏見猛彌『我國に於ける郷土教育と其施設』1932年、50／52頁

- 8) 伊藤純郎 前掲、注6と同、153～159頁

- 9) 熊本大学ホームページ「沿革」

（<http://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/gaiyo/enkaku>）

（官立）熊本師範学校は、その後1949（昭和24）年に学制改革に伴い熊本大学教育学部となった。

- 10) 熊本県師範学校『本校に於ける郷土教育の概要』1935年、表紙／内表紙（頁表示なし）

- 11) 同上、目次（頁表示なし）

- 12) 高島秀樹、前掲、注2と同じ

『郷土教育より見たる川崎市教育』には、著者名（刊行者名）、刊行年が記載されておらず、著者（刊行者）は不詳、記載内容から刊行年を推測するにとどまった状況で検討を加えざるをえなかった。

- 13) 「銅直勇先生年譜」（『明星大学社会学科研究報告』第12集、1980年、所収）20～21頁

故銅直勇教授の蔵書・著書・ノート・資料等については故銅直健氏のご遺族のご厚意により早く明星大学に寄贈していただき、蔵書については明星大学図書館で受け入れを行ったが、ノート・資料等については筆者がその内容を拝見させていただく心づもりで研究室にお預かりし



たものの、筆者の怠慢により検討に取りかけられずにいた。2014（平成26）年になって、ノート・資料等について目を通し、本資料を発見した。筆者の近年の研究テーマと密接な関係を持つとともに、当時刊行されたものとして貴重な資料の紹介・検討が遅くなったことはひとえに筆者の責任であることを付言し、この点について紙面を借りて心からおわびする。

14) 熊本県師範学校、前掲、注11と同、1頁

15) 同上、1～2頁

16) 同上、6～7頁

17) 同上、2頁

18) 同上、2～3頁

19) 同上、4～6頁

20) 同上、6頁

21) 同上、6～7頁

22) 同上、7頁

23) 同上、9頁

24) 同上、11頁

25) 同上、11～12頁

26) 同上、12～13頁

27) 同上、13～16頁

28) 同上、11～12頁

ただし、資料中に記載されている個人名は省略した。

29) 同上、16～21頁

30) 伊藤純郎 前掲、注6）と同じ、126～127頁

31) 当時の文部省の師範学校における郷土教育についての意図は、最も代表的には1931（昭和6）年施行の「師範学校規程中改正」に表れているといえる。

この点については伊藤純郎 前掲、注6）と同じ、112～113頁等参照。

#### 【参考文献】

熊本県師範学校『本校に於ける郷土教育の概要』

1935年、同校

海後宗臣・飯田晃三・伏見猛彌『我國に於ける郷土教育と其施設』1932年、目黒書店

伊藤純郎『郷土教育運動の研究』1998年、思文閣出版

付記 本稿作成にあたって参照した文献であっても、筆者の既発表論文やそこで示した文献等は煩雑になることを恐れ、記載を省略したことをご了解いただきたい。

#### 【付記】

本稿作成にあたって、明星大学通信制大学院教育学研究科教育学専攻博士後期課程に在学し、郷土教育についての研究を進めている大友晃氏の論文草稿、氏との話し合いなどから大きな示唆を受けたことを付記し、感謝の意を表します。

（たかしま ひでき、本学科教授）